『西南アジア研究』No. 91, 2020

近世イランにおける預言者の血と王家の血
――『ダーウード家詩篇』に見る王権と系譜――

The Prophet's and Royal Bloods in Early Modern Iran : Kingship and Genealogy in the *Zabūr-e Āl-e Dāvūd*

近　藤　信　彰
Nobuaki KONDO

Abstract　In January 1750, a man named Mīrzā Sayyed Moḥammad was enthroned in Mashhad as a Safavid king, declaring himself Shāh Soleymān II. However, he was not a direct paternal descendant of the Safavid house and was linked to the royal family only through his mother. He also claimed that he was a paternal descendant of the Mar'ashīs, a local *sayyed* dynasty that ruled the province of Mazandaran from the 14th to the 16th centuries. Why was he able to claim the Safavid kingship? Was the royal family's maternal line that important, or did people trust his *sayyed* blood, which originated from the prophet Muḥammad? This paper provides context to Soleymān II's coronation and explores the relation between kingship and genealogy in 18th-century Iran.

The primary source of this study is the *Zabūr-e Āl-e Dāvūd*, compiled by Moḥammad Hāshem Mīrzā, son of Shāh Soleymān II. Here, *Āl-e Dāvūd* (Davūd family) refers to the family of Mīrzā Moḥammad Dāvūd, father of Shāh Soleymān II. The author traces their family tree from Amīr Qavām al-Dīn I (d. 1379), the first Mar'ashī ruler in Mazandaran. However, a comparison of the work's contents with other sources would lead one to conclude that the evidence presented by Moḥammad Hāshem Mīrzā regarding their Mar'ashī origin is relatively weak. One late 17th-century source even regarded their family as the "sayyeds of lace-sellers," which appears unrelated to the Mar'ashīs. Their claim of Mar'ashī roots surged in the 18th century, when Safavid pretenders tried to assert their rule after Isfahan fell in 1722. Although they considered the Safavid maternal lineage as more important than Mar'ashī paternal lineage, they needed the latter's ancestry to claim kingship.

Keywords　Safavids（サファヴィー朝），Mar'ashī（マルアシー家），Sayyid（サイイド），Shāh Soleyman II（シャー・ソレイマーン２世），*Zabūr-e Āl-e Dāvūd*（『ダーウード家詩篇』）

は　じ　め　に

1750年1月，シャー・ソレイマーン2世がマシュハドで即位した。君主として，この人物はきわめて例外的である。一般に，サファヴィー朝の滅亡はアフガーン族がイスファハーンを征服した1722年，もしくはナーデル・シャーがアッバース3世を廃絶した1736年とされているが，この人物は直系が絶えたのちに，母方の祖父の名をとって，あくまでサファヴィー朝の君主として即位したのである[1)]。すなわち，彼自身は，男系ではなく女系の系譜でサファヴィー王家に連なる人物であり，女系の君主が即位した例は，イラン史上できわめて珍しい。ペリーは，彼の即位をサファヴィー朝復興運動の一つととらえている［Perry 1971 : 63, 65-6］。

また，彼の父方は，14～16世紀にマーザンダラーン地方を統治したマルアシー家というサイエド（預言者ムハンマドの子孫）の名家であるとされている。このことから，マルアシー家に関する諸研究は，ソレイマーン2世をマルアシー家の出身として理解している［Calmard 1991 : 516 ; Calmard 1999 : 422-3 ; Majd 2001-2 : 209-10］。

このサイエドで，女系サファヴィー朝の君主をいかに理解したらよいのであろうか。イルハン朝のガザン・ハン（在位1295-1304）の「サイエドの館」に見られるように，サイエドのイラン史における重要性はしばしば指摘されることであるし［岩武 1992］，マルアシー家や15～16世紀のモシャーシャアなど，地方レベルで政治的支配者になった例もある［後藤 1999 ; Hoveyes 2006 ; 角田 2019］。また，15～16世紀にサファヴィー家／サファヴィー朝がサイエドの系譜を主張したこともよく知られており，支配の正統化の一手段であったと考えられている［Quinn 2000 : 72, 74, 84 ; Morimoto 2010］。16世紀のサファヴィー朝に関するある史料は，君主が他より優れている資質として，シーア派の擁護者であることやサファヴィー教団の教主であることによりも先に，サイエドであることを第一に挙げているほどである［*Takmelat* : 165-6］。しかし，サイエドやスーフィー，マフディーが活躍した14～16世紀とは異なって，サファヴィー朝の支配を経て，12イマーム・シーア派教学が普及した18世紀において，サイエドの系譜がイラン社会でどのように扱われていたかは，検討の余地がある[2)]。一方，小牧昌平は，ペリーのサファヴィー復興運動説を批判し，経緯を詳細に検討した上で，ホラーサーンの地方勢力間の抗争を重視した［小牧 1997 : 179-86］。もちろん，地方勢力の動向は彼の即位において決定的要因であり，それを明らかにした研究上の貢献は大きい。しかし，なぜ，これら地方勢力が彼を君主として推戴しようと考えたのか，そ

1）彼の名前は，サファヴィー朝君主の一覧に見ることができる［Zambaur 1976 : 261, 262 ; Bosworth 1996 : 279］。英文の概説書でも彼の名前は数回触れられている［Avery 1991 : 57, 60-61］。

2）サファヴィー朝期以降のサイエドの地位低下を指摘する研究もすでに存在する［Lambton 1956 : 130 ; Arjomand 1984 : 141-55 ; 近藤 1996 : 17-18］。

の背景にある当時の王権や系譜に対する意識については十分に論じてはいない。より巨視的に見れば，18 世紀イランにおける王権や系譜に関する研究は，未だ不十分な状況にある[3)]。

そこで，本稿ではソレイマーン 2 世の事績を中心に記された一族の歴史である『ダーウード家詩篇』（*Zabūr-e Āl-e Dāvūd*, 以下『詩篇』）を読み解くなかで，王権と血統，系譜に関する著者および同時代人の意識を探っていきたい。すなわち，この一族・この人物ははどのようにして，この地位に上り詰めることができたのか，また，著者や同時代人がいかに彼の一族の歴史を叙述し，ソレイマーン 2 世の即位を位置づけているかを解明することを主眼とする。そのなかに現れる 16 世紀以降の血統観・系譜観を検討するのが本稿の目的である。

なお，『詩篇』については，故ナヴァーイー氏による刊本［*Zabūr/Navāyī*］が 2000 年に公刊されているが，テヘランのマレク図書館の一つの写本に基づくもので，終章が欠けているなどテキストとしては不完全である。後述するように，編者による「マルアシー・サイエドとサファヴィー朝君主の関係の説明」という副題も，本書の内容を適切に反映しているとは言いがたい。ここでは，大英図書館の二つの写本も参照しつつ，議論を進めていきたい。

Ⅰ.『ダーウード家詩篇』

『詩篇』の著者モハンマド・ハーシェム・ミールザー⑳[4)]はソレイマーン 2 世⑰の五男として，1165 年サファル月/1751 年 1 月にマシュハドに生まれた。父はすでに失脚しており，戦乱のなか，兄とともにイラン高原中央部に移り住んだ。キャリーム・ハーン・ザンド（在位 1765-79）には厚遇され，年金を得たが，1184/1770 年以降はイスファハーンに定着し，農業も行っていたという［*Zabūr/Navāyī*: 141］。

本書の題名は，明らかに，旧約聖書のダヴィデの詩篇（Zabūr-e Dāvūd）およびシーア派第 4 代イマームの祈祷集『礼拝者の一葉』（Ṣaḥīfat al-Sajjādiyya）の別名『ムハンマド家詩篇』（Zabūr Āl Muḥammad）を捩ったものと考えられる[5)]。執筆年代については，本書の序文ともう一カ所，1218/1803-4 年に執筆中である記述がある［*Zabūr/Navāyī*: 20, 142］。Or. 3602 写本はここで終わり，あとは終章の前 3 ページが空白である。一方，Or. 154 写本はさらに書き足され，ここから刊本で 12 行分テキストがあり，1226 年ラマダーン月/1811 年 10

3） 18 世紀イランについての最新の論集でもこの問題は扱われていない［Axworthy 2018］。

4） 以下，丸数字は図 1 の人物の番号に対応している。

5） Or. 154 写本では，序文にある題名は『ダーウード家覚書』（Taẕkere-'e Āl-e Dāvūd）となっているが［*Zabūr/Or.154*: 3a］，ここでは他の写本に従う。ダヴィデの詩篇（Zabūr）への言及はすでに，『クルアーン』に見られるが （4 章 163 節，17 章 55 節），1741 年にナーデル・シャーの命でヘブライ語からペルシア語への翻訳が完成したことも，関係しているかもしれない［Netzer 1988: 298］。一方，『ムハンマド家詩篇』という題は，すでに Ibn Shahrāshūb（d. 1192）の著作に見られるが［*Ma'ālim*: 125］，この書物がイランで特に普及したのは 17 世紀以降である［Jānbakhsh 2005: 37-8］。

月にラクナウで書写されたという記述で終わる。さらに刊本の元であるマレク写本には1ページ以上の増補があり，最も遅い日付は1236年ズールカアダ月/1821年4月である［*Zabūr/ Navāyī*: 144］。マレク写本には，奥付に1296年ズールカアダ月/1879年10-11月書写の記述がある[6]。

序文において著者は以下のように述べる（以下，引用文中の括弧中および下線は筆者により補いである）。

> 幸いなる未来の者たちや親愛なる子孫たちには明らかなことかもしれないが，背教者マフムードのイスファハーンへの来襲と高貴なるサファヴィー家の高位なる王朝の滅亡以降，イランの秩序は崩壊し，それぞれの王朝の綴じ紐はほどけ，職人たちは消え去り，かつての法やしきたりは完全に消え失せた。皆が自分のことに当惑し，パンを得るためにさすらい，苦労の極みである。（良き）血統は（皮肉にも）没落の原因となってしまい，その持ち主たちは疲労と悲嘆のなかにいる。人が60歳にさしかかれば，おしなべて，存在の旅支度で，消滅の深淵に向かう。「卑しき者の幸運は，偉大な者の不幸である」[7] と言われる通りである。
>
> 今や，知られており，明らかなことであるが，この間，（運勢が）上下する日々に捕らわれ，誰もこの家系（īn selsele）の過去の人々について（記す）機会がなく，一つの系譜書（nasab-nāme）を書いて，いくつかの出来事や文書類をその中に含めるという考えがなかった。しかし，いまや必要かもしれない。このため，今回，神の宮廷の僕である私，サイエド・モハンマド・ミールザー，別名シャー・ソレイマーン2世の子，モハンマド・ハーシェムが考えつき，必要だと思ったことは，系譜の内容と先祖の伝記の集成とワクフ証書やワクフ財の土地や不動産に関する文書を記し，そして，今後，子孫のうちの一人が事実を知りたいと望んだとき，知ることができるように，自分の先祖の行状について知るように，お互いの親族関係がわかるように，前述の土地や不動産について干渉があったり，ワクフ対象者の占有があったりした場合，どのように分割するか知るようにすることである。ヒジュラ暦1218年にあたる今，可能な限り執筆したので，これを求めるものが現れるかもしれないし，記念となるかもしれない。このあとを，将来の子孫が書き記し，怠らないように。この作品を，『ダーウード家詩篇』[8] と名づけ，序章と2つの章と終章で構成した［*Zabūr/Navāyī*: 20］。

この記述から明らかなことは，『詩篇』は著者が自分の家系について記したものであるが，この部分ではマルアシー家やサイエドの出自については全く触れていない点である。サイエド性をたたえるような文句も，この部分には全く見ることができない。唯一触れている家系

6） Navāyī は1290年と読むが，写本はそのようには見えない［*Zabūr/Malek*: 60b］。ここでは，マレク図書館の写本目録にしたがって1296年と読む［Afshār and Dāneshpazhūh 1982-3: 439］。

7） イマーム・アリーの言葉とされるアラビア語の文句［*Nathr*: 66］。

8） Or. 154だけ題が異なる。註5参照。

はサファヴィー家である。また，「ダーウード家（Āl-e Dāvūd）」のダーウードとは，ここでは明示されていないが，後述する，ソレイマーン２世の父で，著者の祖父にあたるミールザー・モハンマド・ダーウード⑭（以下，ミールザー・ダーウードと略）を指す。すなわち，彼を名祖とする彼の子孫・一族がダーウード家なのである。

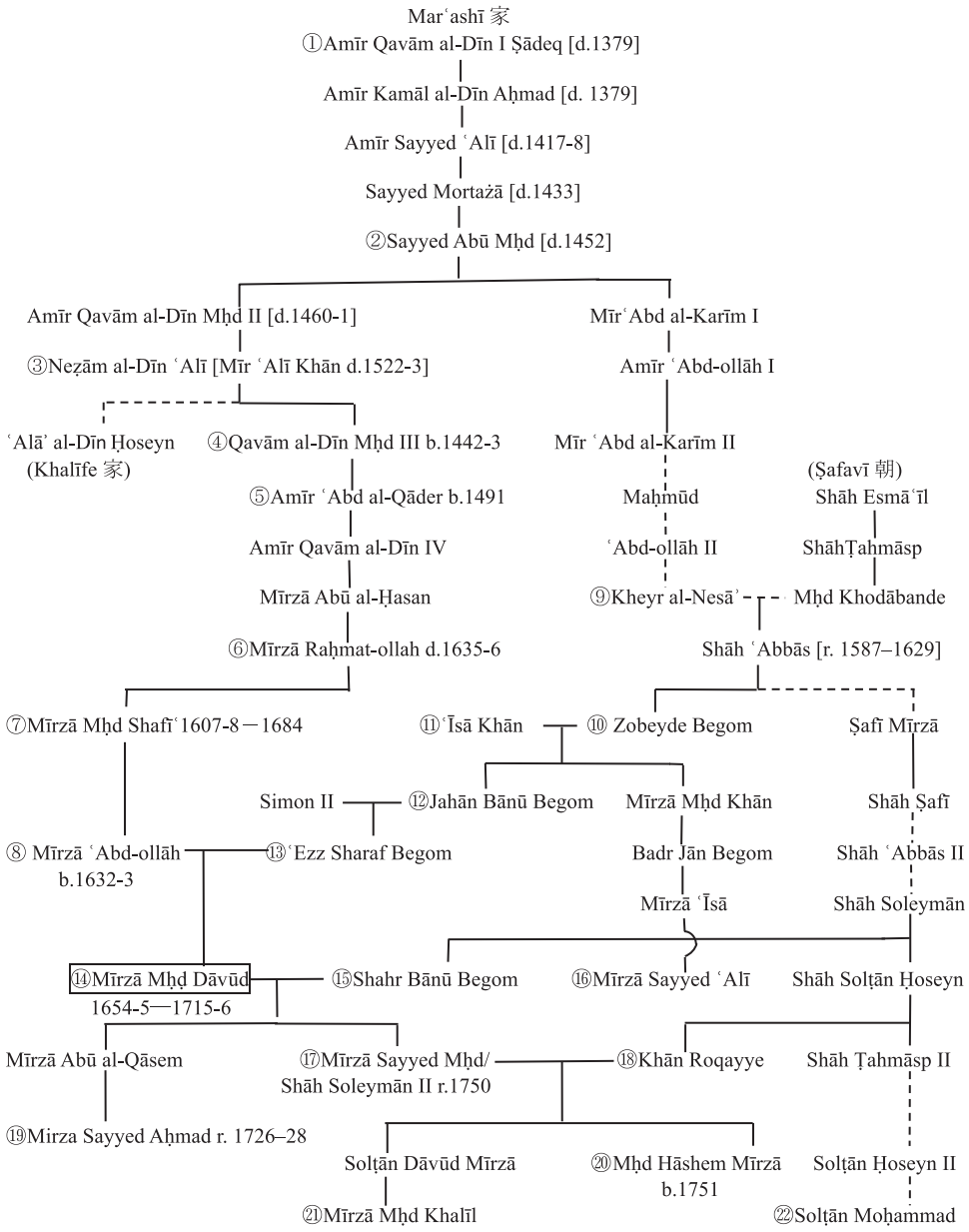
先祖の伝記と並んで，重視されているのがワクフ証書やその他不動産に関する文書である。下線部に関しては，Or. 154 のみテキストが異なっており，「土地や不動産，すなわち，今日まで知られているガーセム・アーバードと『幸運の商館（Khān-e Saʻādat）』に介入があった場合，どのように分割すべきか知るようにする」となっている［*Zabur/Or.* 154 : 3a］。具体的な不動産の名前があがっており，実際的な意味でワクフ財やその他不動産の管理が一つの目的であったことがわかる。マレク写本で欠けているため，刊本には収められていないが，Or. 3602 写本のみに含まれている終章には，ワクフ証書，勅令やファトワーの写しが収められている。

終章以外の本書の構成は，序章はマルアシー家のアミール・ガヴァーモッ=ディーン①（d. 1379）に始まるミールザー・ダーウードの祖先の説明，第１章がミールザー・ダーウードとその子供たちの説明，第２章がシャー・ソレイマーン２世の伝記とその子孫についての説明となっている。序文では「系譜書」という言葉を用いながら，その中心はムハンマドに始まるサイエドの系譜よりも，表題にあるダーウード家，すなわちミールザー・ダーウードとその子孫におかれているように見える。序文に書かれているように，それは先祖から残された不動産の管理とも深く関わっているのである。

Ⅱ．マルアシー家の記述

『詩篇』序章の冒頭で，マルアシー家のアミール・ガヴァーモッ=ディーン①の 12 イマーム・シーア派第４代イマーム，ゼイノル=アーベディーン以降の系譜が示される。マレク写本では系譜に欠落があるが，Or. 154 および Or. 3602 の２写本には欠落はない[9]。アミール・ガヴァーモッ=ディーンは，マーザンダラーン地方の神秘主義教団の導師であり，1358-9 年にこの地方を掌握し，政権を建てた［Calmard 1999 : 414-5 ; 後藤 1998 : 7-9］。基本的に，マルアシー家の歴史を『タバレスターン・ルーヤーン史［*Ẓahīr al-Dīn*］』等に基づいて記述しており，４代あとの（アブー・）モハンマド（d. 1452）②までは，マーザンダ

9） Amīr Qavām al-Dīn Ṣādeq b. Sayyed Kamāl al-Dīn Aḥmad b. Sayyed ʻAbd Allāh b. Sayyed Moḥammad b. Sayyed Abu al-Hāshem b. Sayyed ʻAlī Naqīb-e Ṭabarestān b. Sayyed Ḥoseyn b. Sayyed ʻAlī b. Sayyed Ḥasan b. Sayyed ʻAlī al-Marʻash b. Sayyed ʻAbd Allāh b. Sayyed Moḥammad Akbar Salīq b. Sayyed Ḥasan b. Ḥoseyn al-Asghar b. Zeyn al-ʻĀbedīn. 知られている系譜［Calmard1991 : 511］とは齟齬が多いが，先行する Mīrzā Moḥammad Khalīl の史書とは一致する［*Majmaʻ* : 91］。



実線は，『詩篇』が関係に言及しているもの
点線は，『詩篇』には言及がなく，他の史料で補ったもの

[ ]は，他の文献の情報による
Mḥd=Moḥammad

図 1　『詩篇』にもとづくマルアシー家・ダーウード家・サファヴィー王家関係系図

ラーンの支配者直系の家系と重なっている［*Ẓahīr al-Dīn* : 324 ; Goto 2011 : 250］。

しかし，この後は傍系に入り，人物の事績も少なく，また，『マルアシー家史［*Mar'ashī*］』との齟齬も激しい。たとえば，『詩篇』ではアブー・モハンマドの孫にあたるアミール・ネザーモッ=ディーン・アリー③はティムール朝シャーロフ時代（1405–57）にマーザンダラーンからイスファハーンへ移住したとされている［*Zabūr/Navāyī* : 38］。しかし，『マルアシー家史』では，これはミール・アリー・ハーンという人物であり，マーザンダラーン地方の統治権をめぐって争ったあと，927/1520–1 年に同地で死去している［*Mar'ashī* : 29, 77–78, 92, 99］。さらに，その子の名前は，ガヴァーモッ=ディーン（3 世）④で一致しているが，『詩篇』では多くの土地をワクフとし，ワクフ管理料で生活していたとするのに対し［*Zabūr/Navāyī* : 39］，『マルアシー家史』では，抗争の末マーザンダラーンで殺害されたとする［*Mar'ashī* : 169］。さらにその子とされる 897/1491 年生まれで農業に従事していたアブドル=ガーデル⑤は，『マルアシー家史』には存在しない[10]。17 世紀後半に著された『マルアシー家史』の方がマルアシー家そのものに関してはより信頼できる史料であることから，『詩篇』において，この部分（図 1 の④と⑤の間）で系譜が操作され，ダーウード家とマルアシー家が接合された可能性は否定できない。

実は，『詩篇』に記されたダーウード家の系譜と酷似した系譜を持つ一族がある。それは，シャー・アッバース 1 世（在位 1587–1629）および 2 世（在位 1642–46）の宰相を務めたハリーフェ・ソルターン（d. 1654）の家系（ハリーフェ家）である。この家系の系譜には，前述のアミール・ガヴァーモッ=ディーン①からネザーモッ=ディーン・アリー③までの系譜がそのまま採用されている［*Vaqāye'* : 583–84, Dāneshpazhūh 1969 : 97］[11]。しかも，サファヴィー朝の年代記は，ハリーフェ家の祖として，『詩篇』同様にアミール・ガヴァーモッ=ディーンの子孫のネザーモッ=ディーン・アリーがマーザンダラーンからイスファハーンに移住したことについても言及しているのである［*'Ālam-ārā* : 928］。別の文献もハリーフェ家を「イスファハーンのマルアシー家」として紹介している［*Majāles* : II 89–90］[12]。このハリーフェ家の系譜自体にも，イスファハーン出身の文人ホマーイー（d. 1980）は疑問を呈しているが［Homā'ī Shīrāzī 1996 : 351–52］，早くからサファヴィー朝に仕え，栄達を遂げたハリーフェ家の系譜の方が先に知られていたと考えられ，ダーウード家がこれを利用したことは十分考えられる。ただし，『詩篇』ではハリーフェ家をダーウード家の縁者とは見なしていない。

マルアシー家の記述に比して，アブドル=ガーデル⑤とその子と孫については『詩篇』に

10） ただし，この人物も，Mīrzā Moḥammad Khalīl の示す系譜には含まれている［*Majma'* : 91］。

11） 図 1 も参照。なお，別の系譜史料は，Neẓām al-Dīn 'Alī のかわりに，サーリーの支配者 'Alī を入れている［*Serāj* : 148］。

12） 研究においても，ハリーフェ家はマルアシー家の一部と見なされている［Calmard 1999 : 419 ; Majd 2001–2 : 201］。

おいても事績が少ない。農業への従事や，敬虔であったこと，イラクのアタバートへ参詣に赴いて，亡くなったことなどである［*Zabūr/Navāyī*: 39］。16 世紀の他の文献においては，彼らについての言及は全くない。年代記の詳細なサイエドの紹介においても言及されず［*'Ālam-ārā*: 143-53］，マルアシー家を紹介している同時代文献にも彼らについての言及はない［*Serāj*: 145, 158; *Majāles*: II 87-90］。また，イスファハーンの名家についての研究でも取り上げられることはない［Quiring-Zoche 1980: 210-49］。彼らは，16 世紀においては，決して有力な一族ではなかったのである。

Ⅲ．ダーウード家先祖の台頭

『詩篇』によればダーウード家の先祖で，サファヴィー朝期に初めて公職についたのは，ミールザー・ラフマトッラー⑥であった。ハリーフェ家のミール・ラフィーオッ=ディーン・モハンマドがサドル職にあった時期（1617-8－1624-5），ホラーサーン地方の法務に携わり，マシュハドで死去したという［*Zabūr/Navāyī*: 39-40］。

しかし，この家系の興隆に最も大きな役割を果たしたのは，その子ミールザー・モハンマド・シャフィーウ⑦であった。1016/1607-8 年にイスファハーンに生まれ，王室建物監督官，ワクフ財財務官を歴任したが，1071/1661 年より蟄居し，その間執筆活動を行った。1082/1671-2 年ワクフ財財務官に復帰し，1091/1680-1 年よりサドル代理職に就き，1095/1684 年に死去した。遺体は，自宅前のマドラサ[13]に埋葬された［*Zabūr/Navāyī*: 41］。

彼の資質について，『詩篇』は詳細に述べる。学識があり，人付合いがよく，礼儀正しかった。簿記術（'elm-e siyāq）やナスタアリーク書体に優れ，詩に秀で，文章術や謎かけ詩を得意とした。歴史や系譜，倫理学やハディース，論理の学に造詣が深く，天地創造から始まる数巻からなる史書『利得の海（*Baḥr al-Favā'id*）』を著した。別の著作にサファヴィー朝の系譜もある［*Zabūr/Navāyī*: 40］。学識に優れかつ官僚としても優秀であった様子がうかがえる。

この記述は同時代史料でも多少なりとも裏付けられる。ナスラーバーディーの『詩人伝』では，「大臣・財務官・書記」の章に彼の小伝がある。彼の著作の詳しい説明ののち，王室建物監督官ではなく王室庭園管理官を経て，ワクフ財財務官になったこと，解任されて著作活動に勤しんだことが述べられる。ただし，本稿の関心から奇異に見えるのは，彼が「糸物商（'alāqe-band）として知られるマーザンダラーンのサイエドである」と紹介されている点である［*Naṣr-ābādī*: 99-100］。これを解釈すれば，この家系の起源はマーザンダラーンにあるものの，マルアシー家ではなく，別のサイエドとして認識されていたことになる。「糸物商」という呼び名は先祖が，糸物商を営んでいたことを示しているのであろうか。「糸

13）Madrase-'e Shafi'iyye. Aḥmad-ābād 街区にあった［Rafi'ī Mehrābādī 1974: 39-40］。

物商のサイエド」としては，ほかにエスマーイール2世時代（1576–78）に財務長官職を務めたミール・シャー・ガーズィー Mīr Shāh Ghāzī Eṣfahānī Mostowfī al-Mamālek が知られている［*ʻĀlam-ārā*: 168］[14]。しかし，ダーウード家の先祖と同族であると思われるこの人物は『詩篇』には全く登場しない。

一方，彼がワクフ財財務官として署名・押印した2つ文書の写しが伝世しているが，そのなかでは由来名は単に Ḥoseynī とされている［*Mowqūfāt*: VI 196–97, VII 55］。彼自身の著作『利得の海』のなかでも，自らのことを“Moḥammad Shafiʻ al-Ḥoseynī”とのみ述べるのみである［*Bahr*: 8a］[15]。この時点では，マルアシー家との関係を特に主張することはなかったと考えてよいだろう。

父の活躍に比して，ミールザー・モハンマド・シャフィーウの子アブドッラー⑧の事績は限られている。『詩篇』によれば，彼は1042/1632–3年生まれ，好人物で，詩作に秀でており，文章術や謎かけ詩を得意とした。シャーの恩顧を受け，シャー・アッバースの女子ゾベイデ・ベゴム⑩の計らいにより，その孫娘エッズ・シャラフ・ベゴム⑬と結婚した。王家の宴席で活躍し，近侍（āqāyān）に取り立てられた。アッバース2世（位1642–66）に同行中，テヘランで死去した［*Zabūr/Navāyī*: 42］[16]。

これに対して，ナスラーバーディーの『詩人伝』では，彼の小伝は「サイエド」の章に含まれている。詩才があったこと，数年前に早逝したことを除いて，特に目立った記述はない［*Naṣr-ābādī*: 141］。王家との婚姻関係については，彼の息子ミールザー・ダーウードの小伝で触れられている［*Naṣr-ābādī*: 19–20］。また，ナスラーバーディーは，彼の弟，ミールザー・ハビーボッラーが近侍として取り立てられたことは記している［*Naṣr-ābādī*: 142］。少なくとも，ミールザー・アブドッラーが官僚として栄達を遂げたわけではなかったことは確かである。また，彼がマルアシーという由来名で呼ばれていた形跡もない。

以上のことから，この家系は，学識があり，優秀な官僚でもあったミールザー・モハンマド・シャフィーウの活動によって，台頭してきたと考えられる。もちろん，サイエドの家系ではあったのであるが，彼の息子のミールザー・アブドッラーの時代まで，マルアシー家との関わりを示す同時代史料はない。むしろ，「糸物商のサイエド」として知られていたのである。

しかし，ミールザー・アブドッラーがサファヴィー王家の縁者と結婚したことは，ダーウード家にとって決定的であった。次に，この点を検討しよう。

14） Quiring-Zoche も彼に言及するが，家系の検証はできていない［Quiring-Zoche 1980: 248］。

15） 残念ながらこの史書には著者の一族に関する情報は含まれていない。

16） なお，刊本は彼の雅号をマレク写本にしたがって Marʻash としているが，成立年代の早い他の写本では ʻEshq となっており［*Zabūr/Or. 154*: 27b; *Zabūr/Or. 3602*: 18b］，これは『詩人伝』の記述とも一致する。また，彼の死を Vāleh Dāghestanī の詩人伝（1748–9成立）はソレイマーン時代（1666–94）のこととする［*Riyāż*: 1485］。

Ⅳ．サファヴィー王家との関係

16 世紀のサファヴィー王家の婚姻関係については，シュッペの詳細な研究がある。たとえば，シャー・アッバースの母，マーザンダラーンのマルアシー本家出身のヘイロル=ネサー・ベゴム⑨についても論じている［Szuppe 1995 : 90–100］。ちなみに，マルアシー家とサファヴィー王家をつなぐ最も重要な人物であるヘイロル=ネサーについて，『詩篇』は全く触れていない。つまり，『詩篇』においてマルアシー家そのものはやはり主題ではなく，ダーウード家こそが問題なのである。

さらに，シュッペはサファヴィー家の女婿について，a）トルクマーン（＝キジルバシュ）出身，b）地方名士の出身，c）北部の地方王朝の出身の 3 つに分類している［Szuppe 1994 : 220–31］。しかし，この分類は，17 世紀以降については当てはまらない。たとえば，シャー・アッバースの娘 6 名の婿のうち，a), c）に当たるものは皆無である。主に b）に当たるこの 6 名の内訳は，サイエド 5 名（イスファハーンのシャフレスターニー家出身者 2 名，ハリーフェ家，マシュハドのラザヴィー家の出身者各 1 名，マーザンダラーン出身のミール・アブドル=アズィーム）およびおよびサファヴィー家の親族シェイハーヴァンド家出身者である［Falsafī 1968 : 198–202］。

このシェイハーヴァンド家出身でコルチバシ職を務めたイーサー・ハーン⑪[17]がダーウード家の母方の先祖の一人である。彼がシャー・アッバースの王女ゾベイデ・ベゴム⑩と結婚し，3 人の息子と一人の娘ジャハーン・バーヌー・ベゴム⑫が生まれた。ジャハーン・バーヌーはグルジア副王，カルトリのシモン・ハーン（シモン 2 世，位 1619－1630–1）と結婚し，生まれた娘がエッズ・シャラフ・ベゴム⑬で，彼女が先述のミールザー・アブドッラーと結婚し，ダーウード家の名祖ミールザー・ダーウード⑭が誕生したのである［*Zabūr/Navāyī* : 44］。

ミールザー・ダーウードの伝記は，『詩篇』の第一章にある。1065/1654–5 年生まれの彼は簿記術を含む学問や詩作に優れていた。叔父ハビーボッラーの死後，若くして王の近侍となり，さらにワクフ財財務官となった。11 年間，この職を務めたあと，メッカ巡礼を行い，帰国後，ハーッセ部門財務官に就任した。サドルに任命されるも，これを辞し，1110/1698–9 年，レザー廟ワクフ管財人に任命された。1117/1705–6 年にアタバートに参詣し，1125/1713 年，シャー・ソレイマーンの娘シャフル・バーヌー・ベゴム⑮と結婚，その後，62 歳で死去した［*Zabūr/Navāyī* : 47–50］。このように彼は祖父モハンマド・シャフィーウをしのぐような経歴を持ち，さらに，サファヴィー王家と直接の婚姻関係を持っていた。

同時代史料も彼についての言及が多い。彼のハーッセ部門財務官からレザー廟管財人への

17）Ma'ṣūm Beg の孫，Sayyed Beg の子［*'Ālam-ārā* : 859］。Sheykhāvand 家については，［羽田 1987 : 40–43］参照。

任命，王女との結婚も年代記で裏付けられる［*Shahriyārān*: 218; *Vaqāye'*: 523, 565］。ナスラーバーディーの『詩人伝』では，彼の小伝は，祖父や父と異なって王と王子に関する序章に含まれている［*Naṣr-ābādī*: 19-20］。母がシャー・アッバースの娘の子孫であること，父方の祖父と父の名前にも言及しているが，特にサイエドの家系について触れているわけではない。この『詩人伝』は，1680 年，王女との結婚の前に成立しており，母方の家系が彼を王侯と見なす理由であったことがわかる。実際のところ，ナスラーバーディーのこの章には 3 名の王と男系の王族 1 名以外は，ミールザー・ダーウードも含めて 7 名の女系王族が含まれている［*Naṣr-ābādī*: 11-20］。女系の系譜も重視されていたことの証左であろう。

一方，彼をマルアシーという由来名で呼ぶ史料は『詩篇』［*Zabūr/Navāyī*: 47］以外にはない。彼によるシャー・ソルターン・ホセイン（在位 1694-1722）の建設したマドラサへのワクフ証書（1123/1711 年）の認証も，“Moḥammad Dāvūd al-Ḥoseynī al-Motavallī”とあるに過ぎない［*Mowqūfāt*: III 108］。ただ，成立年代が遅い文献では，「このお方の一族は栄誉あるサイエドの一族であり，イラン全土でその血統が知られている」（1748-9 年）［*Riyāż*: 798］「高位のサイエドたちの中の有力者の一人である」（1751-2 年）［*Ḥazīn*: 146］のように記されており，より父方の血統の評価は上がっていて，マルアシー家との繋がりを示唆しているかのようである。その背景には，次に述べるように，アフガーン軍侵攻後の政治的混乱とそのなかでの王位の主張が考えられる。

V. 王位の主張

1. サイエド・アフマド・シャー

ソレイマーン 2 世に先駆けて，ダーウード家で最初に王位を主張したのは，ミールザー・ダーウードの長男ミールザー・アボル=ガーセムの子，ミールザー・サイエド・アフマド⑲であった。『詩篇』によればアボル=ガーセムは 1080/1669 年生まれ，近侍の一人となり，1722 年のアフガーン軍のイスファハーン包囲の際に戦死した［*Zabūr/Navāyī*: 50-2］。その子サイエド・アフマドは，タフマースプ 2 世（位 1722-32）とともにイスファハーンを脱出，飲酒に耽るシャーと袂を分かって南方へ向かい，軍勢を集めて，ケルマーンで即位し，貨幣を彼の名で発行し，フトバのなかで彼の名前を詠ませた。その後，シーラーズ遠征を行うがこれを落とせず，最終的にはアフガーン軍に敗れて捕らえられ，処刑された［*Zabūr/Navāyī*: 52-63］。

『詩篇』は比較的多くの紙幅を彼について割いているが，その記述は主に 1207/1792-3 年にやはりダーウード家のミールザー・モハンマド・ハリール㉑（ソレイマーン 2 世の孫）[18]

18） 著者の序文での名前の表記は Moḥammad Khalīl b. Solṭān Dāvūd b. Shāh Soleymān al-Ḥoseynī al-Ṣafavī［*Majma'*: 1］で，マルアシーの由来名はなく，刊本の表紙のそれとは異なっている。

によって著された史書『諸史の集い』に基づいている［*Majma'*: 59–80］。また，イラン南部の事件であるため，オランダ東インド会社史料にも比較的多くの情報が含まれている。これによれば，サイエド・アフマドの即位は1726年1月，処刑されたのは1728年8月であった［Floor 1998: 269, 289］。

問題は，ダーウード家と無関係の史料がどのように彼を描いているかである。ナーデル・シャーに関する二つの史書は，サイエド・アフマドについて簡単に伝えるが，「イランの空位期に強情に王子であることを主張した者」［*Jahāngoshā*: 21–23］であるとか，「（王の象徴である）羽根飾り（jīqe）を頭につけて，王であると名乗った」［*Nāderī*: 49］と述べ，サファヴィー家の縁者であることに触れつつも，きわめて冷淡である。一方，普遍史である『諸史の精髄』は，サイエド・アフマドをイランの君主のなかに数え，治世を2年とする［*Zobdat*: 173］。そして，シャー・タフマースプ2世の子，ソルターン・ホセイン2世の子であるソルターン・モハンマド・ミールザー㉒のためにインドで著された『サファヴィー家の利得』には以下のようにある。

> ミールザー・ダーウードの孫である，恩知らずの女系サファヴィー家（ommavī-e Ṣafavī）のサイエド・アフマドは，あのお方（タフマースプ2世）の偽の印を作り，従者を集めてたが，結局，アシュラフ・ギルザイの手によって殺された［*Favāyed*: 89］。

サファヴィー家の男系子孫の立場に立つこの史書は，「女系サファヴィー家」のような言葉で，男系との差違化を図っていることがわかる。いずれの文献もサイエド・アフマドがミールザー・ダーウードの孫であること，サファヴィー家の血を引くことは認識しているが，名前以外にサイエドであることへの言及はない。

2. シャー・ソレイマーン2世

一方，ミールザー・ダーウードの十男であるソレイマーン2世⑰は，『詩篇』によれば，即位前の名前はミールザー・サイエド・モハンマドであり，1126/1714年生まれ，母はシャー・ソレイマーンの長女シャフル・バーヌー・ベゴム⑮であった。『詩篇』はここで，シャー・サフィー時代（1629–42）から行われた女系の王子の殺害や盲刑について説明し，ダーウード家の先祖のイーサー・ハーン⑪とその男子が処刑されたことに触れる[19]。そして，ミールザー・ダーウードは，息子の名付け親をシャー・ソルターン・ホセインに依頼し，このため，サイエド・モハンマドは死刑と盲刑を免れた。彼は王侯のような振る舞いを身につけており，法学，神智学，雄弁術，書記術，簿記術に優れていた［*Zabūr/Navāyī*: 80–84］。

1722年，アフガーン軍のイスファハーン包囲のなか，脱出に成功し，タフマースプ2世に合流し，その妹ハーン・ロガイエ・ベゴム⑱[20]と結婚した。1156/1743–4年，ナーデル・

19）1632年に起ったこの事件は同時代史料でも確認できる［*Kholāṣāt*: 125–126, 132; *Ẕeyl*: 89–90, 93; *Shāh Ṣafī*: 62–63］。

20）刊本ではこの名前は判読できていない。2写本ではKhān Roghayye Begom［*Zabūr/Or. 3602*:↗

シャーにレザー廟の管財人に任命され，マシュハドに移った。アーデル・シャー（在位1747–48）は，彼をレザー廟管財人に加えてサドルに任命した。その後，エブラーヒーム・シャー（在位1748–49）に仕え，5000の軍勢を率いて，コムの町の防衛にあたった。エブラーヒームの敗北後，各地から王位に就くよう依頼があったが，シャーロフ・シャー（在位1748–50, 1750–96）の招きに応じて，サファヴィー家の財宝とともにマシュハドへ移った［*Zabūr/Navāyī*: 86–99］。

この後，ホラーサーンの将軍や有力者16名の要請を受けて，1163年サファル月5日/1750年1月14日にソレイマーン2世は即位に至った。『詩篇』が記すその要請の経緯には，有力者がサファヴィー朝の慣わしにしたがって，彼の面前の床に口づけしたこと，ナーデル・シャーの子，シャーロフ・シャーを君主に仰いだのもその母がサファヴィー朝王女であったことを理由とし[21]，その悪政を見るに，今やサファヴィー家にはソレイマーン2世以外にイランを支配できる人物はいないと主張したことが述べられている［*Zabūr/Navāyī*: 104–5］。また，『詩篇』には，その2日後の日付の有力者の法廷証書の形式を取った誓約書（‘ahd-nāme）が収められている［*Zabūr/Navāyī*: 106–10］。クルド系のチャシュマグザク族を始めとする有力者がソレイマーン2世に忠誠を誓うものであるが，そこでは彼の名はShāh Soleymān ṣānī al-Ṣafavī al-Ḥoseynī として言及されており，マルアシー家には言及がなく，他のサファヴィー朝君主と同一の形式を取っている。誓約書自体，明らかに，サファヴィー家こそがイランの支配者であるべきであり，ソレイマーン2世は血統によりそれに相応しいという論理で書かれている。

さて，他の史料のうち，1781年に成立した『諸史の梗概』は，サイエド・モハンマド（ソレイマーン2世）の紹介に際して，母がシャフル・バーヌー・ベゴムで祖父がシャー・ソレイマーンであることしか述べていない［*Majmal*: 37］。ドゥッラーニー朝の年代記も彼がシャー・ソレイマーンの外孫で，ミールザー・ダーウードの子であることを伝える［*Aḥmad Shāhī*: 146］。著名な詩人伝『拝火寺院』も，彼がシャー・ソルターン・ホセインの妹の子で，女婿であるとする［*Āteshkade*: 473］。『サファヴィー家の利得』は，またも彼に「女系サファヴィー家の」という由来名をつけている［*Favāyed*: 155］。いずれの文献も，サファヴィー朝との関係にしか興味がないようである。

さらに注目すべき文献は『敬虔な者たちの集り』（1776–7）である。著者ガズヴィーニーは14–15世紀の著名なスーフィー，ネウマトッラー教団の祖シャー・ネウマトッラー・ヴァリーの詩（qaṣīde）とされるものを引用する。

また，紅顔の若者が彼の子孫のなかから現れる

彼はエスマーイールのように簡単に政権を取る

↘ 49b; *Zabūr/Malek*: 31b］，Or. 154はKhān Āqā Begom ［*Zabūr Or.* 154: 73a］。

21） シャーロフ・シャーの母は，シャー・ソルターン・ホセインの女子であった。系図は［小牧 1997: 194］を参照。

彼の血統からのもう一人がダーウードの子のように現れ
この世界をこのように終わらすだろう
その君子は神の命で大地を取る
その若者は預言者ソレイマーンのように
神の命で40年間代理となるが
その後，時の主のマフディーが世界を覆うだろう[22)]
［*Maḥāfel*: 36］

著者はこの詩を，サファヴィー朝初代エスマーイール（在位 1501-24）の子孫，ミールザー・ダーウードの子シャー・ソレイマーン2世が40年君臨し，そのあと隠れイマームが再臨すると解釈していた。それどころか，ソレイマーン2世自身が即位以前に同様のことを述べていたのを聞いたという。彼が発行した貨幣に隠れイマームの名を含む対句を刻ませたのもそのためであった。この著者が皮肉を込めて述べるように，実際にはこの君主の治世はわずか40日で終わり，隠れイマームの再臨は起きなかった［*Maḥāfel*: 39］。いずれにせよ，終末論を利用しつつ，この場合も，ソレイマーン2世はサファヴィー朝の君主と理解されている。

これに対して，1207/1791-2年に成立したソレイマーン2世の孫ミールザー・モハンマド・ハリール㉑による史書『諸史の集い』では，初めてイマーム・ゼイノル=アーベディーンに遡るマルアシー家の父系の系譜を『詩篇』と全く同じ形で示すとともに，ゾベイデ・ベゴム⑩，イーサー・ハーン⑪からミールザー・ダーウード⑭に至るサファヴィー家女系の系譜についても説明している［*Majma‘*: 91-2］。いわば，『詩篇』はこの記述を発展させた作品とも言える。

すでに述べたように『詩篇』も『諸史の集い』もダーウード家の末裔による史書であり，この叙述はダーウード家の系譜に関する彼ら自身の主張であると解釈できる。しかも，その主張はソレイマーン2世の即位と深く関わっている。それまでは，単にイマーム・フサインの子孫であることを示すためにホセイニーとのみ示していたものが，即位する王について叙述する際に，その父系の系譜を詳細に示し，強調する必要が生じたと見ることができる。

Ⅵ．文書の内容

さて，次に『詩篇』の序文に述べてあった不動産，ワクフ関係の文書の写しが収められている終章を検討しよう。前述のように，『詩篇』はマルアシー家のガヴァーモッ=ディーン3

22）この詩はネウマトッラー・ヴァリーの詩集には含まれていない［*Ne‘mat-ollāh*］。しかし，1715年に著されたサファヴィー朝を擁護する論策でも引用されており，18世紀に流行していたことがうかがわれる。ダーウードの子，ソレイマーンなる人物が政権を取るという解釈も同じである［*Pādshāhī*: 152-53］。

世④についてもワクフとの関わりについて述べているが，関連する文書は伝世していたのであろうか。

この終章には，ワクフ証書が 3 通，勅令が 5 通，勅令への法学者の添書が 4 通，ファトワーを求める質問が 7 通，その回答 18 通が含まれている。中心となるのは二つのシャー・アッバースのワクフ証書であり，それより古いマルアシー家関係の文書は含まれていない。問題となっている不動産は 3 つである。

1. コム地方のガーセム・アーバード村

コム地方のガーセム・アーバード村とそれに付属する二つの枝村は，1017 年[23] ラビーウ I 月半ば/ 1608 年 6 月末に，シャー・アッバースによって，娘のゾベイデ・ベゴム⑩を対象としたワクフとされた。すなわち，ワクフ財からの収益が彼女に与えられることとなっていた。彼女が亡くなったあとは，その男女の子孫がワクフ対象となった。ワクフ証書はきわめて簡潔で，条件として挙げられているのは，ワクフ財の売買や質入れ，長期の賃貸の禁止というワクフの一般的な条件である［*Zabūr/Or.3602*: 95b–96b］。

ガーセム・アーバード村については，前述のように Or. 154 写本の序文で言及があったほか，『詩篇』の本文中でもシャー・アッバースによってゾベイデ・ベゴムのワクフとソユールガールに定めたこと，夫イーサー・ハーン⑩の処刑とともに，別の人物にソユールガールが奪われたことが記されている［*Zabūr/Navāyī*: 80］。

この村に関連して，さらに，シャー・ソルターン・ホセインによる 2 つの勅令が『詩篇』には含まれている。1119 年ズールカアダ月/1708 年 1–2 月の勅令で，シャーはミールザー・ダーウード⑬にこの村と二つの枝村の税収をソユールガールとして与えた［*Zabūr/ Or. 3602*: 97a–97b］。また，1120 年ジュマーダー I 月/1708 年 7–8 月の勅令は，このソユールガールの金額を確定するとともに，1608 年からの変遷を説明し，ミールザー・ダーウードに再度与えるものであった［*Zabūr/Or.3602*: 97b–100a］。つまり，1708 年時点では，村そのものからの収入も，また，村から得られる税収もミールザー・ダーウードの手にあったと考えられる。

なお，1296/1878 年のコム地方の調査書では，この村はナジャフの学生のためのワクフとなっているが，一度，荒廃して再建した時にワクフ対象を変更したのかもしれない［*Ketābche*: 138–39］。

2. 搾油人のマグスード・アリーの商館/「幸運の商館」

この商館（khān/kārvānsarā）は，イスファハーンの王の広場の近く，王のモスクの東側に位置していた［羽田 1996: 289］。シャルダンも，この商館を詳細に描写しており，所有

23） ペルシア語数字では 1027 年（1618 年）となっているが，文字で書かれている年代に従う。

者を「亡き王の従姉妹」[24] であったとしている［羽田 1996 : 26–8］。サファヴィー朝期のものとされる『イスファハーンの商館一覧』は，シャー・アッバースがこの商館を娘に与えたこと，この史料の記された時代には，王のものとなっていたことを述べる［*Kārvānsarā* : 551］[25]。この娘がゾベイデ・ベゴム⑩であったこと，単に与えたわけではなく，ワクフの形態をとっていたことが，1029 年サファル月 1 日/1620 年 1 月 7 日付のシャー・アッバースのワクフ証書から判明する ［*Zabūr/Or. 3602* : 87a–88a］。

ワクフ財は，マグスード・アリーの差配によって建設された商館と付属施設であった。本体に 191 の部屋があり，付属の商業施設（bāzārgāh）に 30 の店舗，小商館（tīmche）に 26 の店舗を持つ大規模なものであった。ワクフ対象はゾベイデ・ベゴムとその男女の子孫，最初のワクフ管財人も彼女であり，その後はワクフ対象者＝子孫がそれぞれの持ち分の管財人となるように定められた。ワクフ条件も簡単であり，ゾベイデ・ベゴムが管財人のうちは，まず，建物の必要経費を支出したのち，残りは彼女のために用いられることになっていた。

なお，このワクフ証書と同日に発せられた，この商館に関する勅令も『詩篇』に収められている［*Zabūr/Or.3602* : 94a–94b］。この勅令から，この商館が序文にあった「幸運の商館」に他ならないことが明らかとなる。勅令の内容は，この商館に住む，シーラーズやラール出身の商人，インド商人が，ハナグ港やホルムズなど南部方面から来るすべての積み荷を扱い，税を納めるように，というものであった。ラールやホルムズなど南方出身の商人が部屋を持っていたこと，コーヒーや煙草，薬草などが扱われたことは，『商館一覧』が述べるところでもある。そして，さらに，「イスファハーンにはこの商館と商業施設ほどすばらしいものはない」とまで，述べられている［*Kārvānsarā* : 551］。

シャー・アッバースのワクフについては，公共政策として研究されてきたが［McChesney 1981］，このような家族ワクフが存在したこと自体，大きな発見である。しかし，さらに興味深いのは，『詩篇』がこのワクフの受益をめぐる争いに関する勅令やファトワーを収めていることである。その決着を示すのが，1122 年サファル月/1710 年 4 月付のシャー・ソルターン・ホセインの勅令である［*Zabūr/Or.3602* : 92b–93b］。これによれば，この商館をミールザー・サイエド・アリー⑯[26]が，長年不法に占有してきた。ここで，イスファハーンのシェイホル=エスラームであったミール・モハンマド・サーレフなど法学者達に見解を質し，その見解にしたがって，ミールザー・サイエド・アリーの占有分は全体の 3 分の 1 に過ぎず，残りの 3 分の 2 は，ミールザー・ダーウード⑭とその妹，ファフロル=

24） シャー・サフィーの従姉妹にあたるジャハーン・バーヌー・ベゴム⑫のことか。

25） この史料の成立年代は明らかでなく，この商館が王室財産となっていた時期も不明。

26） 彼は，イーサー・ハーン⑪とゾベイデ・ベゴム⑩の息子，Mīrzā Moḥammad Khān の娘 Badr Jahān Begom の息子 Mīrzā ʿĪsā Vazīr-e Eṣfahān の息子にあたる［*Zabūr/Navāyī* : 44］。なお，彼の母は，前述のミールザー・アブドッラー⑧の長女であるが，そのことは法学者の添書やファトワーでは問題にされていない。

ジャハーン・ベゴムの占有に帰すとしたのである。勅令への法学者の添書および関連のファトワーが必要だったのは，そもそもワクフ証書の規程が簡略に過ぎ，受益者および管財人職の継承について，男子・女子の子孫とのみ述べていたからである。したがって，世代をどう考えるか，人数で等分に割るべきかなどについて，法学者の見解も分かれており［*Zabūr/Or.3602*: 88a-92b］，この勅令は何とか合意できる線でまとめたものと言える。そして，この議論で現れる親族関係の複雑さは，『詩篇』が事細かにダーウード家の親族関係を記している主な理由であると考えられる。

その後の商館は，ミールザー・サイエド・モハンマド⑰（後のソレイマーン 2 世）と他のミールザー・ダーウードの子供達の占有に帰した。1153 年ズールヒッジャ月/1741 年 2-3 月付のナーデル・シャーの勅令は，ミールザー・サイエド・モハンマドの訴えにより，利用者がいなくなってしまったこの商館に再び南方の商人を集めるよう，イスファハーンの地方官に命じるものであった［*Zabūr/Or.3602*: 94b-95a］。少なくとも，この時点まではダーウード家の占有下にあったのである[27]。

3. マズブーレザード Mazbūre-zād 村[28]

イスファハーンのレンジャーン Lenjān 郡の村であり，1143 年ラジャブ月/1731 年 1-2 月，ミールザー・ダーウードの妻シャフル・バーヌー・ベゴム⑮（シャー・ソレイマーンの女子）が，この村全体を，夫の墓廟の修理・維持および自らの屋敷の修理・維持等のために，ワクフとした［*Zabūr/Or.3602*: 100b-101a］。最初のワクフ管財人は寄進者本人で，その後は，息子ミールザー・サイエド・モハンマド⑰（後のソレイマーン 2 世），その後は，年長者優先，男子を女子より優先で継承していくよう定められた。

以上のことから，『詩篇』の序文で言及されていた不動産は，すべてサファヴィー家にかかわるものであったことが明らかとなる。特に，シャー・アッバースがゾベイデ・ベゴムのために設定したワクフが，少なくともミールザー・サイエド・モハンマド／ソレイマーン 2 世まで継承されていたのは興味深い。経済面でもダーウード家は，サファヴィー王家が設定したワクフに依存していたのである。

お わ り に

『詩篇』は確かにマルアシー家の記述から始まっている。しかし，16 世紀では有力とは言い難いダーウード家の先祖の台頭に，マルアシー家との関係はあまり認められず，むしろ，

27） 1891 年には，商館の建物は残っていたが，荒廃していた［*Neṣf-e Jahān*: 77］。

28） ワクフ慈善庁イスファハーン支部にはこのワクフ証書の別の写しがあり，出版されている［*Mowqūfāt*: I 434-40］。このワクフ証書の写しでは，この村の名前は Būre zād と記されている［*Mowqūfāt*: I 434-35］。いずれの名前でもこの村は，現在は見当たらない。

17 世紀，ミールザー・モハンマド・シャフィーウの官僚としての活躍を契機としている。そして，「糸物商のサイエド」という別の一族とされていた彼の子，アブドッラーがサファヴィー家の縁者と結婚したことで，彼らは女系ではあったが王家の一員と見なされるようになっていく。新興のサファヴィー朝はサイエドの系譜を用いて権威を高めたが，さえないサイエドであったダーウード家の先祖は逆に王家と結びつくことによって，より高い地位を得ることができたのである。その意味で，サファヴィー朝の支配が続いたことで王家の権威が高まり，逆にサイエドに利用されるという一種の逆転現象が生じていたともいえよう。

しかも，マルアシー家との関係が明確化したのは，時代的に遅く，ミールザー・サイエド・モハンマド／ソレイマーン 2 世の即位にかかわる，18 世紀末～19 世紀初めに成立したの二つのダーウード家出身の著者による文献においてであった。それまでは，単にホセイニーという由来名が使われてきたのであり，この家系を理解するのにマルアシー家という枠組みが適切なのか，疑問が残る。『詩篇』がマルアシー家の本流であるシャー・アッバースの母や近い系譜を持つハリーフェ家に全く触れていないのも不自然である。

ミールザー・ダーウードやソレイマーン 2 世は女系でありながら，サファヴィー家のものと認識されていた。シャー・サフィーが行った女系男子の殺害や盲刑，ナスラーバーディーの『詩人伝』における王族の記述など，女系ではあっても，王族あるいは王の候補と見なされていたことは確かである。しかし，もちろん，ペリーが示すように［Perry 1971］1722 年にイスファハーンが陥落して以降，サファヴィー家の縁者が各地で支配者として求められていたことが，サイエド・アフマド・シャーやソレイマーン 2 世の即位を可能としたという側面もある。『詩篇』がこだわった土地や不動産も，実はサファヴィー家が設定したワクフであった。その意味でダーウード家は，女系サファヴィー家の一つと考える方が妥当であろう。

歴史叙述として見た場合，『詩篇』はダーウード家出身の著者による祖父ミールザー・ダーウードと父ソレイマーン 2 世を中心に描いた家系史ということになる。彼らにとっては，現実には女系のサファヴィー家こそが重要であったのだが，それでも伝統を踏まえて，男系の先祖から語り始めざるをえなかった。特にソレイマーン 2 世の即位に関連して，『詩篇』において彼らが，男系においても王に相応しいしかるべき先祖を必要としたとすれば，かつてマーザンダラーンを支配したマルアシー家はまさにこの条件に適合するものであったろう。この史書における接続の不自然なマルアシー家の系譜はこのように理解できるのである。

したがって，『詩篇』はサファヴィー朝にかかわる系譜による王権の正統化の試みの最後のものと言えよう。中央アジアにおけるチンギス裔の重視やティムール裔の主張，オスマン朝における系譜の作成など，系譜による正統化の試みはムスリム諸王朝に広く見られた[29]。

29）　コーカンドにおけるティムール裔の主張については，Erkinov 2013。オスマン朝の系譜については小笠原 2014。

しかし，この史書が著されたとき，イランを支配していたガージャール朝は，支配の正統化において，サファヴィー家にも系譜にも頼らない異なったアプローチを取った［Kondo 2019］。『詩篇』は，いわば，イランにおける系譜の時代の最後を飾る作品なのである。

参考文献

Aḥmad Shāhī : Maḥmūd Ḥoseynī Jāmī. *Tārīkh-e Aḥmad Shāhī*. Ed. Gholām Ḥoseyn Zargarī-nezhād. Tehran. 1384Kh.

ʻĀlam-ārā : Eskandar Monshī. *Tārīkh-e ʻĀlam-ārā-ye ʻAbbāsī*. Ed. Īraj Afshār. Tehran. 1350Kh.

Āteshkade : Loṭf ʻAlī Beg Āẕar Begdelī. *Āteshkade-'e Āẕar : Nīme-'e Dovvom*. Ed. Mīr Hāshem Moḥaddeṣ Tehran. 1378Kh.

Baḥr : Moḥammad Shafīʻ al-Ḥoseynī. *Baḥr al-Favāyed va ʻAqd al-Farāyed*. MS. Ketābkhāne-'e Marakazī, Dāneshgāh-e Tehran. Elāhiyat 235.

Favāyed : Abū al-Ḥasan Qazvīnī. *Favāyed al-Ṣafaviyye*. Ed. Maryam Mīr Aḥmadī. Tehran. 1367Kh.

Ḥazīn : Moḥammad ʻAlī Ḥazīn Lāhījī. *Taẕkerat al-Moʻāṣerīn*. Ed. Moḥammad Sālek. Tehran. 1375Kh.

Jahāngoshā : Mīrzā Mahdī Khān Āstarābādī. *Jahāngoshā-ye Nāderī*. Tehran. 1341Kh.

Kārvānsarā : Īraj Afshār ed. Kārvānsarā-ye Eṣfahān. In R. Jaʻfariyān ed. *Mīrāṣ-e Eslāmī-e Īrān*. 5. Qom. 1376Kh. 541-61.

Ketābche : Ketābche-'e Tafṣīl-e Ḥālāt va Amlāk va Mostaghelāt va Qanvāt va Bolūkāt-e Dār al-Īmān-e Qom. In Ḥoseyn Modarresī Ṭabāṭabā'ī ed. *Qom-nāme*. Qom. 1364Kh. 85-171.

Kholāṣat : Moḥammad b. Khājegī Eṣfahānī. *Kholāṣat al-Siyar*. Ed. Īraj Afshār. Tehran. 1368Kh.

Maʻālim : Ibn Shahrāshūb. *Maʻālim al-ʻUlamā'*. Ed. Muḥammad Ṣādiq Āl Baḥr al-ʻUlūm. Beirut. n. d.

Maḥāfel : Moḥammad Shafīʻ ʻĀmelī Qazvīnī. *Maḥāfel al-Mo'menīn fī Ẕeyl-e Majāles al-Mo'menīn*. Ed. Manṣūr Chaghatāyī and Ebrāhīm ʻArabpūr. Mashhad. 1383Kh.

Majāles : Nūr Allāh Shūshtarī. *Majāles al-Mo'menīn*. Ed. Ebrāhīm ʻArabpūr et al. Mashhad. 1392Kh.

Majmaʻ : Mīrzā Moḥammad Khalīl Marʻashī Ṣafavī. *Majmaʻ al-Tavārīkh*. Ed. ʻAbbas Eqbāl Ashtiyānī. Tehran. 1362Kh.

Marʻashī : Mīr Teymūr Marʻashī. *Tārīkh-e Khāndan-e Marʻashī-e Māzandarān*. Ed. Manūchehr Sotūde. Tehran : 1364Kh.

Mojmal : Abū al-Ḥasan Golestāne. *Mojmal al-Tavārīkh*. Ed. Modarres-e Raẕavī. Tehran. 2536Sh.

Mowqūfāt : Sayyed Hoseyn Eshkevarī. *Asnād-e Mowqūfāt-e Eṣfahān*. 10vols. Qom. 1387-88Kh.

Nāderī : Moḥammad Kāẓem Marvī. *ʻĀlam-ārā-ye Nāderī*. Ed. Moḥammad Amīn Riyāḥī. Tehran. 1369Kh.

Naṣr-ābādī : Moḥammad Ṭāher Naṣr-ābādī. *Taẕkere-'e Naṣr-ābādī*. Ed. Moḥsen Nājī Naṣr-ābādī. Tehran. 1378Kh.

Nathr : Shaykh Abu ʻAlī al-Faḍl al-Tabrisī. *Nathr al-La'ālī'*. Ed. Muḥammad Ḥasan Zibrī Qā'inī. n. p. 1426AH.

Ne'mat-ollāh : *Dīvān-e Kāmel-e Shāh Ne'mat-ollāh Valī*. Ed. 'Abbās Khayyātzāde. Kerman. 1380Kh.

Neṣf-e Jahān : Moḥammad Mahdī Eṣfahānī. *Neṣf-e Jahān fī Ta'rīf al-Eṣfahān*. Ed. Manūchehr Sotūde. Tehran. 1368Kh.

Pādshāhī : Moḥammad Yūsof Nājī. *Resāle-'e Pādshāhī-e Ṣafaviyye*. Ed. Rasūl Ja'fariyān. Tehran. 1387Kh.

Riyāż : Vāleh Dāghestānī. *Riyāż al-Sho'arā*. Ed. Moḥsen Nājī Naṣr-ābādī. Tehran. 1384Kh.

Serāj : Sayyed Aḥmad b. Moḥammad Kiyā Jīlānī. *Serāj al-Ansāb*. Ed. Mahdī Rajā'ī. Qom. 1409AH.

Shahriyārān : Moḥammad Ebrāhīm Naṣīrī. *Dastūr-e Shahriyārān*. Ed. Moḥammad Nāder Naṣīrī Moqaddam. Tehran. 1373Kh.

Shāh Ṣafī : Fażl Allāh Ḥoseynī Tafreshī. *Tārīkh-e Shāh Ṣafī*. Ed. Moḥsen Bahrām-nezhād. Terhan. 1388Kh.

Takmelat : 'Abdī Beg Shrīrāzī. *Takmelat al-Akhbār*. Ed. 'Abd al-Ḥoseyn Navā'ī. Tehran. 1369Kh.

Vaqāye' : Sayyed 'Abd al-Ḥoseyn Khātūn-ābādī. *Vaqāye' al-Senīn va al-'Avām*. Ed. Moḥammad Bāqer Behbūdī. Tehran. 1352Kh.

Zabūr : Solṭān Moḥammad Hāshem Mīrzā. *Zabūr-e Āl-e Dāvūd*

/*Navāyī* : Ed. 'Abd al-Ḥoseyn Navāyī. Tehran. 1379Kh.

/*Or.154* : MS British Library. Or. 154.

/*Or.3602* : MS British Library. Or. 3602.

/*Malek* : MS Malek Library. 3815.

Ẓahīr al-Dīn : Ẓahīr al-Dīn Mar'ashī. *Tārīkh-e Ṭabārestān va Rūyān va Māzandarān*. Ed. Moḥammad Ḥoseyn Tasbīḥī. Tehran. 1363Kh.

Ẕeyl : Eskandar Beg Torkamān. *Ẕeyl-e Tārīkh-e 'Ālam-ārā-ye 'Abbāsī*. Ed. Soheylī Khānsārī. Tehran. 1317Kh.

Zobdat : Moḥammad Moḥsen Mostowfī. *Zobdat al-Tavārīkh*. Ed. Behrūz Gūdarzī Tehran. 1375Kh.

Afshār, I and M. T. Dāneshpazhūh（1982-3）. *Fehrest-e Ketābhā-ye Khaṭṭī-e Ketābkhāne-'e Mellī-e Malek*. Tehran. 1361Kh.

Arjomand. S. A.（1984）*The Shadow of the God and Hidden Imam*. Chicago.

Avery, P.（1991）Nādir Shāh and The Afsharid Legacy. In : P. Avery et al.（ed）*Cambridge History of Iran* VII. Cambridge. 1-62.

Axworthy, M.（ed）（2018）*Crisis, Collapse, Militarism and Civil War*. Oxford.

Bosworth, C. E.（1996）*The New Islamic Dynasties*. Edinburgh.

Calmard, J.（1991）Mar'ashī. *EI*[2].

————（1999）Une Famille de Sādāt dans l'histoire de l'Iran : Les Mar'ašī. *Oriente Moderno* 18（2）, 413-28.

Dāneshpazhūh, M. T.（1969）. Asnād-e Vaqf-e Khānedān-e Khalīfe Solṭān. *Nāme-'e Āstān-e Qodds* 9-1/2（1348Kh）. 97-117.

Erkinov, A. (2013). "Fabrication of Legitimation in the Khoqand Khānate under the Reign of 'Umar-Khān (1225-1237/1810-1822)." *Manuscripta Orientalia* 19 (2), 2-18.

Falsafī, N. (1968) *Zendegānī-e Shāh 'Abbās-e Avval*. Vol. 2. Tehran.

Floor, W. (1998) *The Afghan Occupation of Safavid Persia 1721-1729*. Paris.

Goto, Y. (2011) *Die südkaspischen Provinzen des Iran unter den Safawiden im 16. und 17. Jahrhuderet : Eine Analyse der sozialen und wirtschaftlichen Entwicklung*. Berlin.

Homā'ī Shīrāzī, J. (1996) *Tārīkh-e Eṣfahān*. Ed. M. Homāyī. Tehran. 1375Kh.

Hoveyes, A. (2006) *Die Geschichte der Muša'ša'iyya-Dynastie*. Hamburg.

Jahānbakhsh, J. (2005) Kūsheshhā-ye Majlesī-e Avval va Dovvom dar Rāh-e Sāmāndehī-e Matn-e Enteqādī-e Ṣaḥīfe-'e Sajjādiyye va Tarvīj-e Ān. *Payām-e Bahārestān* 54, 33-44.

Kondo, N. (2019) How to Found a New Dynasty : The Early Qajars' Quest for Legitimacy. *Journal of Persianate Studies* 12, 261-87.

Lambton, A. K. S. (1956) Quis custodiet custodes? Some Reflections on the Persian Theory of Government (Conclusion). *SI* 6, 125-46.

Majd. M. (2001-2) *Mar'ashiyān dar Tārīkh-e Īrān*. Tehran. 1380Kh.

McChesney, R. (1981). Waqf and Public Policy : The Waqfs of Shāh 'Abbās, 1011-1023/1602-1614. *Asian and African Studies* 15, 165-90.

Morimoto, K. (2010) The Earliest 'Alid Genealogy for the Safavids : New Evidence for the Pre-Dynastic Claim to Sayyid Status. *IrSt* 43, 447-69.

Netzer, A. (1998) Bābā'ī Ben Nūrī'el *EIr* 3, 298.

Perry, J. R. (1971) The Last Ṣafavids, 1722-1773. *Iran* 9, 59-69.

Quinn, S. (2000) *Historical Writing During the Reign of Shah 'Abbas : Ideology, Imitation, and Legitimacy in Safavid Chronicles*. Salt Lake City.

Quiring-Zoche, R. (1980) *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert : ein Beitrag zur persischen Stadtgeschichte*. Freiburg.

Rafī'ī Mehrābādī, A. (1974) *Āṣār-e Mellī-e Eṣfahān*. Tehran.

Szuppe, M. (1994) La Participation des femmes de la famille royal à l'exercice du pouvoir en Iran safavide au XVI siècle (première partie). *SIr* 23, 211-58.

——— (1995) La Participation des femmes de la famille royal à l'exercice du pouvoir en Iran safavide au XVI siècle (seconde partie). *SIr* 24, 61-122.

Zambaur, E. De. 1976. *Manuel de Genealogie et the Chronologie pour l'histoire de l'islam*. Osnbrük.

岩武昭男 (1992) ガザン・ハンのダールッスィヤーダ(dār al-siyāda)『東洋史研究』50(4), 48-82.

小笠原弘幸 (2014)『イスラーム世界における王朝起源論の生成と変容』刀水書房.

後藤裕加子 (1999) カスピ海沿岸の二つのサイイド政権の成立 —— 西暦 14, 15 世紀のイラン社会と民俗イスラム『史学雑誌』108(9), 1-39.

小牧昌平 (1997) 18 世紀中期のホラーサーン —— ドッラーニー朝とナーデル・シャー没後のアフシャール朝『東洋史研究』56(2), 176-200.

近藤信彰（1996）19 世紀シーラーズの名家と地方社会『歴史学研究』685，13–24.
角田哲朗（2019）マフディーかく語りき ―― サイイド・ムハンマド・ムシャアシャのマフディー自称論理『史林』102(3), 33–72.
羽田正（1987）シャー タフマースプのキジルバシ政策『オリエント』30(2)，28–46.
――――（1996）『シャルダン『イスファハーン誌』研究 ―― 17 世紀イスラム圏都市の肖像』東京大学東洋文化研究所.

（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）